

第4章 大隅半島



横瀬古墳（大崎町）

第1節 先史・古代の大隅半島

大隅半島は2市（鹿屋市・垂水市）・2郡（曾於郡・肝属郡）からなり、薩摩半島と鹿児島湾を挟んで対峙している。

北は標高1237mの高隈山地、中央はシラス台地と肝属平野、南は国見山地からなり、東側は志布志湾・太平洋、西側は鹿児島湾に面する。高隈山地は中生層と花崗岩からなり、肝属平野は肝属川等の河川の侵食および堆積作用からなる広大な水田地帯をなす。国見山地も花崗岩からなり、花崗岩に含まれる雲母が当地方の縄文時代・弥生時代の土器に顕著に含まれることも指摘されている。

1 旧石器時代

大隅半島においては、旧石器時代の調査はほかの地域に比べ遅く、周知の遺跡数も面積に比して少ないようである。鹿屋市の国道220号線バイパス建設に伴い榎木崎A遺跡・榎木崎B遺跡・西丸尾遺跡等の調査により、榎木崎A遺跡からは細石刃文化期のブロックが3か所検出され、水晶製の野岳型細石核と砂岩製の畦原型細石核とが出土している。榎木崎B遺跡からはナイフ形石器と台形石器及び細石刃文化期の石器に伴い礫群9基とピット群が検出され注目された。西丸尾遺跡からはナイフ形石器文化期のブロック7か所と礫群5基が検出され、石器もナイフ形石器・剥片尖頭器・三稜尖頭器やすり石・たたき石等豊富な種類・量が出土している。また、細石刃文化期もブロック2か所と礫群4基が検出されている。石器も局部磨製石斧をはじめ多く出土している。榎木原遺跡からは、旧石器時代から縄文時代草創期と思われる落とし穴が14基も検出されている。

近年東九州自動車道関連で調査された末吉町桐木遺跡・耳取遺跡では膨大な量の遺物が出土している。桐木遺跡からはナイフ形石器文化期の遺構で15～20個程度の礫で構成する特徴のある礫群が検出されている。細石刃文化期でも石器製作と思われる様子がうかがわれ、数千点をこえる遺物も出土している。耳取遺跡からはナイフ形石器文化期が剥片尖頭器等を中心としたXVI層・XVII層と小型の台形石器が多量出土したXIII層に細分された。剥片尖頭器の時期では炭化物を伴った礫群が約90基検出されている。

この礫群は径及び深さが30～40cmの土坑内に拳大の礫が15～50個入っている特徴あるものである。また、女性を表現したと思われる線刻礫も出土し注目された。細石刃文化期もXI層とXII層に細分されることが確認できている。

この他にも、松山町山ノ田遺跡・西原遺跡、志布志町道重遺跡・中原遺跡等から細石刃文化期の遺跡が散発的に発見されている。

2 縄文時代

縄文時代草創期は旧石器時代と同じように桜島起源の薩摩火山灰の下層より出土するもので、旧石器時代、特に細石刃文化期の遺跡と重なる場合が多く遺跡の数も少ないようである。鹿屋市の西丸尾遺跡では無文土器と石錘・礫器・たたき石・石皿等が出土し、掘り込みを持たない2基の集石遺構が検出され、墓の可能性も考えられている。伊敷遺跡では隆帯文土器と磨製石斧の破片が出土している。末吉町桐木遺跡では県内で見られる隆帯文土器とは様相が違う隆起線文土器が出土し東日本で見られるものに近い特徴をもっている。また、石鏃も共伴し集石遺構も検出されている。耳取遺跡でも桐木遺跡と同様の状況が見られる。

縄文時代早期になると、遺跡は大隅半島のほぼ全域に分布範囲が広がると共に数も増加する傾向がみられる。ただ、海岸部や平野部には及んでいない。鹿屋市では鹿屋バイパス建設に伴う調査をはじめとする前畑遺跡・榎崎A遺跡・飯盛ヶ岡遺跡・西丸尾遺跡・西丸尾B遺跡・打馬平原遺跡・岩ノ上遺跡・霧島ヶ丘遺跡等多くの遺跡が知られている。これらの遺跡では集石遺構が検出されているが、飯盛ヶ岡遺跡では約130基もの集石遺構が見つかった。

肝属郡内でも田代町ホケノ頭遺跡・荒田原遺跡、根占町大中原遺跡、吾平町中尾遺跡・和田遺跡、高山町後田山下遺跡・鐘付遺跡、串良町益畑遺跡など多くの遺跡が調査されている。益畑遺跡は平成14・15年度に調査が行なわれたものであるが、肝属郡内で初めて縄文時代早期の集落（竪穴住居跡・連穴土坑等）が確認された遺跡として注目される。

曾於郡内では志布志町をはじめとして縄文時代の遺跡が早くから知られていたが、近年の調査の増加

に伴い遺跡数も増加している。財部町耳取遺跡・踊場遺跡、末吉町桐木遺跡・地蔵免遺跡・関山遺跡、大隅町葛原遺跡・久保崎遺跡・片水段遺跡・出水平遺跡、輝北町前床遺跡、大崎町下堀遺跡、志布志町東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡・山之上遺跡・別府石踊遺跡・倉園B遺跡・土光A遺跡・下田遺跡・道重遺跡・潤ヶ野遺跡・夏井土光遺跡、松山町山ノ田遺跡、有明町仕明遺跡・屋部当遺跡等が東九州自動車道建設・大隅横断道路建設・県営圃場整備事業等に伴って調査されている。その中で特筆すべきは、志布志町倉園B遺跡の竪穴住居跡4軒・連穴土坑10基・土坑32基、集石遺構60基・配石遺構6基が検出された集落遺跡・同夏井土光遺跡の竪穴住居跡3軒、同下田遺跡の土製の耳栓、桐木遺跡で桜島のP-11火山灰の上層から塞ノ神B式土器・下層から塞ノ神A式土器が出土し、塞ノ神式土器の編年に指標を示したことなどがあげられる。また、近年調査された串良町益畑遺跡でも竪穴住居跡や連穴土坑が検出されている。

縄文時代前期になると遺跡はやや少なくなり、轟式土器・曾畑式土器に代表される汎九州的な様相が強くなる。鹿屋市神之牧遺跡・榎木原遺跡、吾平町蓑損原遺跡・四方高迫遺跡、志布志町野久尾遺跡・別府石踊遺跡等で轟式土器・曾畑式土器・深浦式土器が見られる。志布志町片野洞穴では、前期から中期・後期の土器が出土し、かんざし・釣り針などの骨角器も見られる。

縄文時代中期は、阿高式土器・岩崎式土器に見られる凹線文を施す南九州的な土器と、瀬戸内地方の船元式土器や関東地方の加曾利式土器との関連をうかがわせるキャリパー形の春日式土器とが出土するようになるが、それらが共伴することは少ない。また、大隅地方においては阿高式土器は少ない。田代町岩崎遺跡は岩崎式土器の標識遺跡で階段状の道が構築されていたことでも注目されている。松山町前谷遺跡では春日式土器に共伴して、瀬戸内系の船元式・里木式土器が出土したほか、この時期では少ない竪穴住居跡5軒が検出されている。鹿屋市榎木原遺跡・末吉町桐木遺跡でも春日式土器と船元式土器が共伴している。大根占町轟木ヶ迫遺跡では春日式

土器が多く出土しているが、船元式土器を伴わないことが報告されているが、春日式土器の中でも後出するタイプのものとされている。

縄文時代後期は、指宿式土器・市来式土器を中心とした南九州色の強い文化が発達した時期である。また、貝塚が形成されたり、南島や北部九州まで分布を広げるなど海とのかかわりが強くなる時期でもある。貝塚は、垂水市柊原貝塚、佐多町大泊貝塚、桜島町武貝塚の3遺跡と少ない。柊原貝塚は台地上に貝等を積み上げるタイプの貝塚で、後期を中心に晩期まで形成されている。土器・石器のほかに動物骨・魚骨・種子・糞石等の自然遺物の出土や土壌墓、埋葬された可能性のある犬骨など貴重で膨大な資料が得られている。後期の遺跡は山間部・海岸部共に多くが存在する。末吉町中岳洞穴は当地方では数少ない洞穴遺跡で後期から晩期へかけての遺物が出土する。また、同丸尾遺跡は丸尾式土器の標識遺跡である。鹿屋市榎田下遺跡・鎮守ヶ迫遺跡、根占町前田遺跡、志布志町柳井谷遺跡・夏井ヶ浜遺跡・中原遺跡等でまとまった遺物が出土している。鎮守ヶ迫遺跡では宮崎県でよく出土する綾式土器も見られる。

前田遺跡では、開聞岳起源の黄ゴラ火山灰を挟んで指宿式土器が出土している。中原遺跡では、在地の土器に混ざって瀬戸内地方の磨消縄文系の土器が多く出土している。瀬戸内系の土器としては中津式系・福田KⅡ式・彦崎KⅠ式・津雲A式系土器等が見られる。

縄文時代晩期は、後期から続く遺跡が多く、ほぼ同じような遺跡の在り方である。後期と大きく異なる点は土掘具と思われる扁平打製石器が著しく増加することである。このことが縄文時代の農耕に直接結びつくという考え方には未だ問題は残るとしても、弥生時代の稲作農耕へと繋がるものではないかという可能性は否定できない。また、晩期については、近年編年上で再検討が行なわれつつあるところで、前半の上加世田式・入佐式土器等は後期とするべきではないかとする研究者もいるがここでは従来どおりの編年観で記述する。鹿屋市榎木崎B遺跡・飯盛ヶ岡遺跡では前半の上加世田式土器、榎木原遺跡では後半の蓆目圧痕文土器が出土している。垂水

市柊原貝塚は後期から晩期へかけての貝塚である。土器は上加世田式・入佐式などが出土しているが、加世田市上加世田遺跡で出土している岩偶等の軽石製品や緑色を呈する石で作られた玉類が数多く出土している。遺構では竪穴住居跡2軒、土壇墓1基が検出される。宮下遺跡では、晩期後半の刻目突帯文土器が多く出土し、弥生時代への移行期の遺跡として認識される。大隅町鳴神遺跡では、扁平打製石斧13本が埋納された遺構も検出されている。末吉町では、入佐式土器の標式遺跡である入佐遺跡がある。また、上中段遺跡は、夜臼式土器が多量出土し、靱痕のある土器片や朝鮮無文土器に出自を求められる丹塗り磨研壺・彩文土器が見られることなどから北九州・大陸との交流及び稲作農耕を基盤とする弥生時代への過渡期の遺跡として注目される。

3 弥生時代

稲作農耕の開始によって始まるとされる弥生時代は、北九州に始まり、間断をおかず全国に広がって行ったとされている。南九州においても吹上砂丘沿岸部を中心に稲作農耕を思わせる前期の遺跡が見られる。

大隅半島においても、前期の遺跡は見られるが遺跡の規模としては小さく、分布も散発的である。垂水市宮下遺跡は縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にある遺跡と思われるものである。中期になると遺跡の数も規模も爆発的に増加する。弥生時代中期を代表する山ノ口式土器は、大隅式土器と呼ばれていたように大隅半島の各地で発見されている。串良町吉ヶ崎遺跡は、山ノ口式土器に先行する中期中葉の遺物が出土する集落遺跡であるが、焼失家屋が発見され、住居内に完形の土器が10個体ほど残されており貴重な一括資料を提供するものである。大根占町山ノ口遺跡は山ノ口式土器の標識遺跡であるが、旧砂浜に営まれた祭祀遺跡で、サークル状の配石遺構が発見されている。完形の山ノ口式土器や北部九州で見られる須玖式土器などが出土している。また、軽石製の岩偶（男女）・家・陽石等特殊な遺物も見られる。この遺跡の調査により山ノ口式土器の年代が明らかになった。また、開聞岳起源の暗紫グラが土器に付着しており、火山活動の年代との比

較ができることも重要である。鹿屋バイパス建設に伴う調査では、王子遺跡をはじめ中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡・前畑遺跡・中原山野遺跡・飯盛ヶ岡遺跡と相次いで集落が発見された。中でも王子遺跡は竪穴住居跡27軒、棟持柱を有する掘立柱建物跡6棟、掘立柱建物8基、土坑を有する建物（1間×1間）2基とそれまでの南九州の弥生時代の様相を一変する内容で、弥生時代の「クニ」を彷彿させる遺跡として全国的な保存運動にまで発展した。また、矢羽状透かしを有する高坏や凹線文土器が出土し、瀬戸内特に愛媛辺りとの交流が盛んであったことも知られた。中ノ丸遺跡の山ノ口式土器の壺形土器には口唇部に櫛描波状文が施されているものがあり、器形の変化も合わせ考えて後期に下る可能性を持つものとして注目される。このほかにも垂水市宮下遺跡、根占町谷添遺跡、高山町波見西遺跡、東串良町西牟田遺跡、大崎町沢目遺跡、下掘遺跡、有明町長田遺跡等で集落遺跡が相次いで発見され、肝属川流域を中心としたの肥沃な土地に弥生文化が根付いていたことがうかがわれる状況を示している。しかしながら、後期になると遺跡の数は減少する。鹿屋市鎮守ヶ迫遺跡等で後期の松木菌式土器が出土するくらいで、集落遺跡は発見されていない。吾平町名主原遺跡では、弥生終末から古墳時代初頭にかかるものと思われる集落（竪穴住居跡52軒以上）が調査された。竪穴住居跡にはいわゆる花卉状住居と称されるものが見られる。

4 古墳時代

稲作農耕を基盤とした弥生時代以降階級社会が発展し、「クニ」が形成されていった。さらに「クニ」は統廃合され、大きな力を持つ権力者（王）が出現する。その最も大きなものが「倭国」を統一した大和地方を基盤とするものであろう。権力者たちは、その力を誇示するために地上に盛り土をした大きな墓を造るようになる。これが今日古墳と呼ばれるもので、中央勢力の波及の様相を示すものである。

鹿児島県内においても、志布志湾沿岸・西海岸沿い等に高塚墳が築かれ、中央勢力が及んでいることが知られている。特に大隅半島の志布志湾沿岸部においては、国指定史跡の東串良町唐仁古墳群・高山

町塚崎古墳群・大崎町横瀬古墳をはじめ前方後円墳17基、円墳304基の存在が知られている。この地方で最も古い古墳としては、5世紀前半の志布志町飯盛山古墳とされていたが、近年相次いで学術的な調査が行なわれ、4世紀代までさかのぼる可能性がでてきた。主な高塚墳は、吾平町寺山古墳群、串良町上小原古墳群・岡崎古墳群・東串良町唐仁古墳群、高山町塚崎古墳群・軍原古墳群・西横間古墳群、大崎町神領古墳群・飯隈古墳群・横瀬古墳、有明町原田古墳、志布志町飯盛山古墳等である。また、この地域には南九州特有の地下式横穴墓が存在する。地下式横穴墓は群集することが普遍的で、高塚墳と共存することも多い。分布域をみると西は短甲を副葬している鹿屋市祓川地下式横穴墓、東は松山町京ノ峯遺跡と肝属川流域、志布志湾沿岸部に集中している。この地域の地下式横穴墓の特徴は古いタイプのものにはよく軽石製組合石棺が使用されていることである。軽石製組合石棺は高塚墳にも用いられていることがある。串良町岡崎古墳群では、円墳の周溝部に竪穴部をもつ地下式横穴墓が調査されており、高塚墳と地下式横穴墓の埋葬者には密接な関係があっただろうことが想定される。当地方の地下式横穴墓の時期についてみると、これまでは5世紀後半頃のもののが最古と考えられてきたが、2001年から鹿児島大学の橋本達也により調査が進められている岡崎古墳群において、19号墳（円墳）の周溝に竪穴部を持つ3基の地下式横穴墓が発見された。その内2基が調査されているが、玄室内には花崗岩の箱式石棺墓が置かれている。副葬品等から5世紀前半まで遡る可能性のあるもので、地下式横穴墓の年代観に一石を投じるものである。終末はとみると、これまで高山町横間地下式横穴墓群から蕨手刀を副葬するものがあり、蕨手刀の年代観から8世紀まで下るものと考えられてきた。吾平町中尾地下式横穴墓群では、円頭太刀を副葬するものがあるが、竪穴部が非常に長く、宮崎県で終末の地下式横穴墓と考えられている下耳切遺跡、築池地下式横穴墓・2号と同様の特徴を持つものである。近年の研究では終末は7世紀代であろうと考えられ、横間地下式横穴墓の見直しをする必要がある。

古墳時代の集落についてみると、南九州の古墳時代の土器として知られている成川式土器の出土している遺跡は枚挙にいとまがないほどであるが、集落としてとらえられた遺跡は以外に少ない。鹿屋市根本原遺跡、根占町千束遺跡、吾平町中尾遺跡、高山町後田山下遺跡・花牟礼大都原遺跡・東田遺跡、串良町益畑遺跡、有明町仕明遺跡・長田遺跡等があげられる。中尾遺跡は中尾地下式横穴墓群と隣接し、花牟礼大都原遺跡は塚崎古墳群と隣接しており、集落と墳墓と密接な関連があったものと考えられるものである。後田山下遺跡・東田遺跡では中空の脚台を有する成川式土器の甕形土器に混ざり丸底の甕形土器（全国的な傾向）が多く見られる。また、東田遺跡では初期須恵器も見られる。そのほかに高山町軍原遺跡、串良町上小原古墳群・岡崎古墳群では初期須恵器の樽型甕や甕も出土している。これらのことから、この地方（古墳の集中している地域）においては、畿内等の中央と密接な関係を持っていたことが考えられる。

5 奈良時代以降

大隅半島においては、土師器や須恵器の出土している遺跡は多いが、調査例が少なく特筆する遺跡は少ない。鹿屋市宮の脇遺跡では青銅製の帯金具（丸軛）が出土し古代官位制をうかがうことができる。高山町波見西遺跡では掘立柱建物跡3棟が検出されている。また、径約3mの範囲に土師器の坏・埴がまとまって大量に置かれた遺構が検出されている。西山ノ上遺跡からは須恵器の風字硯が出土しており、この地に識字者がいたことをものがたるものであるが性格の判明しない遺跡である。近年の東九州自動車道関連の調査では、財部町踊場遺跡・高篠遺跡があるが、踊場遺跡では、掘立柱建物跡9棟、焼土跡、古道、軽石集積遺構、礫集積遺構等と共に斜面を削平し平坦面を造り出して建てられた掘立柱建物跡が検出されている。特に、斜面を削平して造られた建物部分及びその周辺からは、彩色された土師器壺や脚台付きの埴・坏・墨書土師器等が出土し、祭祀等の特殊な遺構であることを想定させられるものである。高篠遺跡では、掘立柱建物跡17棟、屋内炉6基、屋外炉9基、古道などが検出された。そのほかにも

須恵器・土師器（墨書を多く含む）・焼塩壺等多くの遺物が出土している。また、特殊な遺物として蛇紋岩製の石製飾具（巡方）が出土しているが、宮の脇遺跡と共に律令制の広がりを知る上で興味深いものである。輝北町烏居ヶ段遺跡では、竪穴状遺構・土坑・溝・古道・焼土跡等の遺構が検出され、遺物も須恵器・土師器が多量出土している。土師器の中には墨書土器が28点も含まれている。また、黒色土器や赤色顔料の付着したものが多く見られ、祭祀的な様相の強い遺跡であることが考えられる。

（中村耕治）